

この地方第一の山で、標高一千四百五十五メートル、牧水の故郷東郷村坪谷の生家からは、左手正面に全貌が見わたされる。父の病氣のため郷里に帰り、周囲の状況によつて上京が不可能となり、一時郷里に引きこもることを決意したところの作品である。不本位な日月ではあつたが、久びに對する尾鈴山は懐しく愛すべき姿でそびえており、秋もなお霞がたなびいて、秋というほどのどけきである。人生の岐路に立つた牧水ではあつたが、こうした自然のなぐさめが、どんなに救いとなつたことであろうか。「朝づくさうすき紅葉の山に照りつちもぬくみ」に「鶴鳥の啼」「阿蘇荒の日にかみあはれぬうすすかすみ」のごとく秋の山雲らなど、歌集「みなかみ」巻頭の「故郷」と題する一連には佳作が多い。なおこの「ふるさと」の歌は生家の裏の自然に刻まれた。

書 翰

(中学二年時代)
旧正月元旦、俗塵百尺の磯打つ浪松吹く風ノ里ニテ
前略御免
○貴兄には其後相変わらず風、浪音、を友として長閑にすこやかに此世の憂きを知らず給はず御暮しの事と申候 呵々々々
○雲井二歌ヲ雲雀ノ声聞ク時長閑ニ霞ノ山辺ヲ見ル時トコニカ遊ビニ行キ度ク候ヘ共悲シイ哉身ハ籠リ鳥只室内ヨリ否籠ノ中ヨリリシテ居リ候 嗚呼嗚呼
○当地方へ御出デノ節ハ是非学校ヲ御訪ヒ下サレタカ候是非是非
○今ヨリモ猶時々ノ御通信ハ切望ム所ニ有之候
○先ツ貧書生ノ悲シサ只ノ半紙ニサヘ書ク筆ヲ以テ西洋紙ニヨテ乱筆ヲ以テ御伺ヒ迄早々(小生ノ字ヲ書ク事ノ上手ナルニハ驚キマス小学校ノ時カラ少しモ交リマセン)
若山
山本大兄
兄上六助様ニモ宜シク御伝言ヲ乞フ
○新聞では本校校長をヒドク攻げシテアルソドスガソナニ悪イ校長デハナイノデスヨ
○本校の校地を都合五千坪ばかり拡張致シマシタスイブン大キナ大キナ運動場にナツタデスヨ
○秘モツカアナタヲ御訪問致シ今昔ノ話ナド致シ

忘るることが出来ぬ、興に乗じて廻りもせぬ口を叩き立て、汚い唾を顔面もなく吐きちらして貴兄をヘキエキさせたことを深く悔い居る。僕の癖だ、気にさわつたら許してくれたまへ。
あの夜の約束「武蔵野」をお送りする、夜涼秋の近きを覚えずと静かに息を細めて見たまへ、屹度或一種の印象が深く深く胸に刻まれているに相違ない。秋に読むのが最も適当に居る、空蒼く風幽かな秋の日、阿蘇の噴火口の前に立つて覚ゆる爽やかな感じが或はこの小冊子の中に含まれてゐるのとも限らぬ、云々までもないが、この独歩の作物を、弦音や浪六やまたら紅葉柳浪等の作物と同じやうな態度で読んだらそれは大間違ひである。兄の好むといふ激石のそれとも異にして居る、然し兄はよく斯般の情趣を解し得る人だと僕は見て居る。だから僕の最愛の食物の「武蔵野」をお貸し申すのだ。
冊中の二十篇とりどりに皆い、二三幼稚の気のあるものもあるが、それは見逃し給ひ、どれも皆静かに読んで繰返して見給へ、味はなんだん深くなる。
僕は心から兄にこの一冊を紹介することを喜ぶ、そして若しこれを読了の際の兄の感想をきくことを得たら、更に幸いだ。
去る、そして紀州大和あたりに放浪したい、京に着くのは九月の中旬だらう、宿半紙ニサヘ書ク筆ヲ以テ西洋紙ニヨテ乱筆ヲ以テ御伺ヒ迄早々(小生ノ字ヲ書ク事ノ上手ナルニハ驚キマス小学校ノ時カラ少しモ交リマセン)
若山
山本大兄
兄上六助様ニモ宜シク御伝言ヲ乞フ
○新聞では本校校長をヒドク攻げシテアルソドスガソナニ悪イ校長デハナイノデスヨ
○本校の校地を都合五千坪ばかり拡張致シマシタスイブン大キナ大キナ運動場にナツタデスヨ
○秘モツカアナタヲ御訪問致シ今昔ノ話ナド致シ

千葉県、細野春翠宛の絵はがき
さびしい雨の日いつも空想する野の中の君の村に君を置いて君のことを思ふと君も同じく君も同じく君のさびしさと僕のさびしさと勿論違ふだらうが何かしらむやみに淋しい十五日 牧水

牧水の歌碑
(一)北海道等
渡の湯に越ゆる路名も寂し暮坂峠
何崎玉果秩父市秩父町出づれば来れば機をりのうた声つづく古りし家並に
(二)東京都立川市立川の駅古茶屋さくら樹のみちのかげに見送りし子
(三)神奈川県須賀市しら鳥はかなしからずやそらの青海の青にもそまざた小淵沢
(四)山梨県小淵沢甲斐の国小ぶちぎはあたるの高はらの秋のすゑつかたの雲のよろしさ
(五)長野県浅間町山路を越えて来ぬ長かりしけふの山路 残しかりたる紅葉は照りて餌に饑うる鷹もぞ啼きし上野の草津の湯より 沢

故郷の歌 懐郷の歌
○海の声
母恋しかかる夕べのふるさとの桜咲くらむ山の姿よ春は来ぬ老いにし父の御ひとみに白うづらむ山さくら花
父母も神にも似たるこしらに思ひ出ありや山さくら花
日向の国むら立つ山のひと山に住む母恋し秋晴の日や蝉や寝ものがたりのをりをりに涙もまじるふるさとの家
檳榔樹の古樹を想へその葉陰海見て石に似る男をも(青島より)
○独り歌へる
雲去ればものかげなく日向の国都井の岬の青潮に入りゆく端に独り海見る
○故郷
峰あえま横は伏せる峡間河越えむとし蝸を聞く父の髪は白み来ぬ子はまだ遠く旅をおもへる一人のわがたらちねの
登り来(一)宮崎県延岡市城山なつかしき城山の鐘り鳴いてぬをさなかりし日間まじごとくに(二)都井岬日向の国都井の岬の青潮に入りゆく端にひとり海見る(三)延岡高等学校うす紅に葉はいはやく萌えいでて咲かむとすなり山さくら花(四)坪谷ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海に向へる彼の岡の上に(五)都農町ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海に向へる彼の岡の上に(六)鹿兒島県牧園町有明の月は芽えつつ霧島のやまの深間に霧たちわたる(七)静岡県沼津香貫山香貫山いだしにきて吾子とおそびさしをれば富士ははれにけり

あなかしこし静けし御魂にふるさとに父よ御墓にけふも詣て来ぬ心の闇に浸る瀨の音、心のうづるに響く瀨の音、瀨の音
あたたかき冬の朝かなうす板のほそ長き舟に耳川くたわれも木を伐る、ひろきふもとの雑木原春日つめたや、われも木を伐る(酢熊歌)
春の木立に小斧振ることのかなしさよ、前後不覚に伐りくづしけり
秋のおち葉榊の木にかけあがり来よと児猫がわに
あどる
阿蘇荒の日にちもあらぬうすすかとすみのごとく秋の山雲を
母が鯛ふ秋蚕の匂ひたちまよふ家の片すみに置きぬ机を
いづくにか父の声きこえて古き大きな家の秋のゆふべに
はたはたとよるこぶ父のあから顔の世ならぬ尊さに涙おちぬれ
さきのこと思ふときならぬ善き父の眉ぞくもれる眉ぞくもれる
秋の日あし追ひつづつる群をおひ父もすがら蠅うちくらす
老いふけし父の友どちうちつどひ酒酌む冬の窓の夕陽の影の中眠れるごとくこのふるさとかなしみに蜜の透きとほれかし
鯛のみ食ひつづつ幾日すぎにけむ榊の葉の日々散る家に
味気なき夕なるかな眼の前
の膳の酒さへ好の焚火さへ飲むなと叱り叱りながらに母がつづつ暗き部屋に夜
の酒のいろ
母を思へばわが家は玉のごとく冷たし父を思へば山の
ごとく温かし
ふるさと山の五月の杉の木に斧振る友のおまげの
木に斧振る友のおまげの
見ゆ
おもひやるかのうす青き峽
のおくにわれのうまれし朝
のさびしき
親も見し姉もいとほしふる
さとにただ檳榔樹を見にか
へりたや
ふるさと美々津の川のみ
なかにひとりし母の病み
たまふとぞ

牧水 祭行事

1. 学童音楽会	9.00~10.30	坪中
2. 歌碑祭	11.00~12.00	歌碑前
3. 講演会 短歌会	1.00~ 3.00	坪中
4. 祝賀会	3.00~ 4.00	同
5. 学童作品展	9.00~ 4.00	同